# 3.枚方は「牧方」であった

2023 年 4 月 17 日

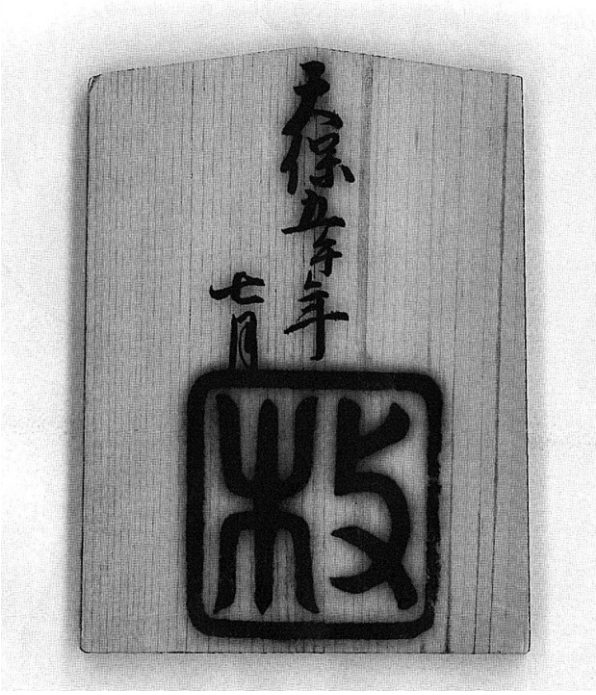
堀家　啓男

享和元年(1801)に刊行された当時の観光案内書、「河内名所図会」では枚方宿は「牧方駅」として紹介され、「ひらかたのえき」と振り仮名が付されています。このように江戸時代、「枚方宿」を「牧方宿」と記している刊行物や古文書が多いです。読み方からすれば当然「まきかた」となるところですが、当時の人々は当たり前のように「ひらかた」 と読んでいました。市史第 3 巻近世編に掲載されている資料で調べてみると、公文書では 享保 9 年(1724)の浜揚荷口銭に関する道中奉行の申し渡し書、役所の公印である枚方過書船番所の署名と公印、船番所が発行する文書などで使われています。また幕府道中奉行が作成した文化 3 年(1806)の道中絵図「東海道分間（ぶんけん）延絵図」でも枚方村の地名が「牧方村」になっています。江戸時代の前期から幕末まで、公文書、私文書を問わず「牧方」が使われています。

一方、「枚方宿大助郷弐拾九ヶ村高付帳」のように「枚方」を使っているケースもありますが、数は少ないです。確かにくずし字辞典をみると「枚」のくずし字は「牧」であるので、間違いではないのでしょう。江戸時代の初め、宿役人がお役所との文書のやり取りの際、くずし字で「牧」と送ってきたのを、お上のご威光には逆らえないと、それに準じて「牧」で送り返し、慣用化したのでしょうか。よくわかりません。

元禄 2 年(1689)、枚方を通った貝原益軒は「枚方は、世俗あやまって牧方とかく。 枚の字をかくべし。」と記しています。　(参考「郷土枚方の歴史」)

「河内名所図会」や淀川の「増補登船独案内」（天保 8 年、1837)、「淀川両岸一覧」(文久元年、1861)のような旅人が利用する観光ガイドブックでも「牧方」が使われています。明治にはいってもときに使われ、たとえば、昭和 4 8 年発行の枚方小学校百年誌にある、明治 9 年(1876)の卒業証書の写真では、同小学校を「牧方小学」と印刷しています。旧市史の記述では明治 13 年(1880) 4 月に設置された枚方郡役所、匝瑳（そうさ）胤常初代郡長の提唱で「枚方」に一定されたということです。




くらわんか船の鑑札　-枚方八郎兵衛-